

『与謝野晶子と私』の要約 check paragraphing before sending off

ジャーニーン・バイチマン

日本ではとても有名な与謝野晶子は海外では、特に欧米では、一般の人にはほとんど知られていません。私は1980年代から晶子研究をやってきて、現在その評伝の第二巻を執筆中です。晶子の研究を始める前に、正岡子規を研究していて、私の晶子研究はその子規研究からはじまりました。それをまず説明したいと思います。

私の大学院はアメリカのコロンビア大学でしたが、指導教授だったドナルド・キーン先生の勧めで、修士課程と博士課程の両方で正岡子規を研究しました。正岡子規は35歳で結核で若死にしましたが、その最後の3年ぐらいは病床生活でした。私にとって、一番感動的な作品は、その病床に苦しみながら、自然の美しさをみている時の作品です。子規は、この世に深くあこがれていたことをあらわに表現しませんが、おのずからその気持が響いてきます。

こういう風子規を読めるようになって、子規の特徴的な組み合わせ～一種の遠慮と奇妙に強い表現力～に慣れてきて、それは詩歌のあるべきスタイルであると思うようになってきました。

その時まで、与謝野晶子の作品はキーン先生の日本文学選集に入った数編の歌と詩しか知りませんでした。しかし、博士論文を書くことになりました時、子規と同じ時代の詩人についてももう少し勉強しないとイケないと思って、晶子の作品を読み始めました。

最初は子規に比べれば、晶子の短歌がかなり必要以上にあらわに感情を表現しているように感じて、反発しました。また、子規がなるべく外の世界をそのままに映すのに対して、晶子の歌は世界をそのままみるのではなく、いつも自分的一部分としてみるので、あまり好きになれませんでした。それは1970年ごろでした。

しかし、1980年代になって、欧米で、また日本で、女性学が盛んになりはじめました。その女性学から刺激を受けて、自分も女性詩人を勉強したいと思うようになりました。当時高く評価された近代詩人の中で、晶子は唯一の女性でしたので、晶子の作品をまた読み始めました。

晶子の作品を勉強し始めると、不思議に思うことがありました。それは、彼女が64歳まで生き、20以上の詩歌集を発表しているのに、当時の定説によれば初期の恋愛歌、特に『みだれ髪』しか評価され得なかったということでした。女性学に刺激されて、その定説は間違っているかもしれないと思って、晶子の中期と晩年の作品を調べ始めました。結論からいうと、その通りでした。たしかに初期は恋が主な主題でしたが、中期・晩年は、それに加えて、出産、社会、詩を書くこと自体についても晶子は膨大な作品——短歌も詩も——を書いています。ちょうどそのころ、大岡信が雑誌『花神』を始めましたが、そこになにかを書くようにすすめて下さいましたので、そこに「文学における性差別——与謝野晶子の評価をめぐって」を書きました。1970年代の後半から、日本人の批評家の数人による晶子の中年・晩年の作品についての著書と論文が発表されはじめましたので、1980年代から、晶子についての評価が変わってきました。また、彼女の業績は短歌だけでなく、詩にも、エッセイにも、児童文学にもあるという見解が、今では定説の一部になっています。ただ、まだ一つだけ問題が残ると思います。それは、晶子の作品がすべて、伝記として読まれていることです。

実は与謝野晶子は幻想的な詩人であると思います。子規のようにこの世をそのままに見ることもできますし、また出産、結婚、大自然について素晴らしい作品もあります。ですから、一面では現実を描く詩人であり、その作品を理解するため、その伝記の記述が助けになります。しかし、半面、内部世界にある映像、感情、思想を種にする歌と詩が多くあります。晶子は内部的な想像の世界を外部的な現実の世界と同じ位大事にしました。

子規の美と苦しみ、生と死を均等に表す詩歌ほど素晴らしいと思う晶子の歌は何かというと、晶子の幻想の歌、特にその無限の自由を表す歌です。

ようやくいえば、私は正岡子規のドライ、さっぱりしたスタイルからフェミニズムを経由して与謝野晶子にたどり着きました。そして、ここでは、豊かな、幻想的な世界を見つけました。

子規と晶子とは、よく反対のように見られています。子規は現実主義、晶子はロマン主義です。子規の歌の構成が均等的で、晶子の歌の構成はわざとバランスを崩している。子規が表に気持ちを表現しないのに晶子は表に出し、子規が比喩をほとんど使わないのに、晶子は頻繁に使う、などです。しかし、子規が

生と死、美と苦しみ、病と健康の間の境目から歌を作ったように、晶子も現実の世界と幻想の世界をまたがっていました。二人とも非常に大きい、幅広い頭脳の持ち主だったと思います。